

六千六百万円のゴッホの話題

中右 瑛

最近のアートな話題は、もっぱらアノ「ゴッホ」である。

オークションに出品された作者不明の油絵が、実はゴッホの作であることが判明。オークションでの落札予想最低価格が、一万〜二万程度とされていたものがゴッホとわかって、ナント！六千六百万円にまでせりあがったのである。

私も、このオークションには過去にたびたび参加したのだが、これ程に話題になったのは初めてである。

この浮世絵巷談で「ゴッホ」を取りあげたのは、ゴッホとウキヨエとは深い関係がある。ゴッホは大のウキヨエ好きで極貧にもかかわらずウキヨエをコレクションし、いまもゴッホ美術館には四百点以上ものウキヨエが保管されている。なかでもゴッホは大の広重ファンで、広重の名作「名所江戸百景・大はしあたけの夕立」や「名所江戸百景・亀戸梅屋舗」など模写したことも知られている。理想郷のユートピア、日本を夢想したゴッホは、広重の風景画を模写することで、はるかなる江戸の街に遊んだのだった。

広重の話は、またの機会にするとして、ゴッホの話題に移ろう。

このオークション出品は、文化勲章受賞の故川一政画伯の遺産で、出品作百六十八点のなかにゴッホの油絵が混ざっており、作者不明「農婦」と題されていた。

主宰者シンワアートオークションの社員は「いや、びっくりしました。日本オークションでゴッホが出品されるのは初めてです。」

この「農婦」がゴッホの初期作品とよく似ており、ゴッホ作ではないかと、主催者がオランダ・アムステルダムのゴッホ美術館に鑑定依頼をしていたのだった。

オークション開催の直前になって、ゴッホ美術館の調査報告で真作と判明。この「農婦」はゴッホの死後、痛みが激しく修繕、加筆されていたため、判定が難しかったという。

オークションの前々日、これらの事実が公表され、新聞ニュースで全国に知れ渡り注目された。

二月八日、東京「アート・ミュージアムキンザ」のオークション会場は熱気に包まれ、オークションは実施されたのである。参加者はまだかまだかと気もそぞろ。始まって約四時間後、最後の一品として待ちに待った話題のゴッホ「農婦」が登場した。

当初予想の落札価格の一万二万を大幅に繰りあげて、五百万円からスタート。一気に六千六百万円にまでハネあがり、広島の「ウッドワン美術館」（広島県佐伯郡吉和村）が落札した。美術館では、思いもかけず話題のゴッホが思ったより安く入手出来てご満悦。ゴッホが日本に留まり、美術館のある吉和村は、おおきな「宝」が来ると大いに歓迎している。四月ごろに公開される予定だという。

ゴッホはオークションではいつも話題の中心である。

神戸新聞平成十五年二月九日 ゴッホ落札を報じた記事

を三億六千万円で落札している。

代理人の画商によると、中本氏は八日朝に出品を知り「ぜひ広島にグッズを」と購入を決意したという。同美術館のコレクションに加え、一般公開する予定。

オークションにかけられ6600万円で落札されたゴッホの油彩画「農婦」＝8日夜、東京・銀座のアート・ミュージアム・ギンザ



真作判明の「農婦」

6600万円

洋画家 故中川一政氏が所有していた美術コレクションのうち、ゴッホの作品であることが分かった油絵「農婦」が八日、オークションにかけられ、当初「作者不詳」として二万二万円とみられていた予想価格を大幅に上回り、六千六百万円で落札された。

落札したのは広島県の伯郡吉和村)館長の中本住宅建材メーカー「ウツ利夫氏(モミ)。中本氏は「ドワン」会長で、「ウツ〇〇〇年にも岸田劉生(毛糸肩掛せる麗子肖像ドワン美術館」(同県佐

広島美術館長落札

著作権関係者によると、日本のお金シヨンの本が取り上げられるのは初めて。会場には予想を超える五百人以上が参加し、五百万円からスタートした値はみるみる引き上げられた。主催者側も「コレクシヨン全体に高値となり、まさに「ゴッホ効果」」（羽佐田信治・シフトワートークシヨンの常務）と喜んだ。

十数年前、バブル絶頂時代、五十三億円の「ひまわり」を日本企業が落し、同じころ「アイリス」が百二十数億円というゴッホとしては最高記録を樹立し日本人がセリ落した。それらに比べるとバブル崩壊、不景気時代とはいふものの「農婦」が六千六百万円とは安い。

このゴッホ効果でオークションは大いに盛り上がり、総売上げは当初の予想の三倍に達したという。

それにしても、ゴッホと判明したタイミンクがよかった。もし、ゴッホということが不明のままオークションが実施されていたなら、一・二万円

「わが手に入ったのでは…」

と勝手な想像をして、大魚を逃して悔しがる者もいる。オークションはスリルとエキサイト連続。掘り出しものを狙う一攫千金の夢とロマンにみち、オークションならではの醍醐味である。

不況のさなか、近年には無いちよつと楽しいショー
ゲキ的なニュースで、地下のゴッホならずとも、
中川一政画伯も、きっと苦笑しているに違いない。

「北斎ミステリー」は次号につづく。

■中右 瑛（なかう・えい）

抽象画壇。浮世絵・夢二エッセイスト。一九三四年生まれ、神戸市在住。行動美術協会において奨励賞、新人賞、会友賞、行動美術賞受賞。浮世絵内山賞受賞。半どん現代美術賞、兵庫県文芸化賞、神戸市文化賞など受賞。現在 行動美術協会会員、国際浮世絵学会常任理事。著書多数

みだら夜話^{やわ} 第三回

イカナゴの季節

あさぎ まだら
浅黄斑^{あさぎ}〈作家〉

いんどう とおる
絵・犬童 徹



酒と食が生き甲斐の小生。相変わらず、いろいろ食っております。たとえば「北野クレーン」で

フレンチを。生田神社前に戻った「安さん」ではテッチリとテッサ、「きんぴら」で和歌山の漁師料理を食った勢いで「猫音屋」というところで、クエ鍋という珍しいものも食っちゃいました。さらに勢いにかけて、震災後に芦屋へ移転した「神戸館」まで足を伸ばし、絶品ステーキをとった具合です。

でも、こんなことを書き連ねたところで読者がおいしい気分になれるはずもなく、この野郎、とねたまれるのがオチでしょうね。はい、はつきり自慢です。どうだ、こんなうまいもんを食ったぞ、うらやましいだろ、ってやつですね。小生、小心であるわりには、こんな性格の悪さも持ち合わせ

ております。すみませんね。（開き直ってどうする？）

もっとも日々を美食に明け暮らしているわけはありません。普段は古女房の手料理を食しておりますし、外食にしても「王将」の五目麺セットだったり、「家族亭」の親子丼セットだったりします。ミニうどんがついたやつですね。それにしても、近頃の丼の豊富さには目を見張っております。いったいどのくらいの種類があるのでしょうか。小生が若かりし頃は、丼といえば、鰻丼は別格として、親子丼、玉子丼、木の葉丼、それにカツ丼くらいなものでしたが…。

それにしても、丼、と書いてなぜ「どんぶり」なのか。丼とは果して料理の名であるのか、器の名であるのか。はたまた、どういう謂われが潜ん

でいるのか。皆様、そういった疑問を持たれたことはございませんか。ああ、ありませんか。なら、いいんですけれどね。でも、長らくその謎を追いかめ、ついに突き止めた小生としては、これを書かずにはおれません。しかしながら、これを書くにはやや紙数が足りなくなりそうですし、それには「みだら」な話に及びそうにもないので、これは次回のお楽しみということで、はやばやと予告をいたす次第。

話はどうしても食い物から離れませんが、いよいよ「イカナゴの釘煮」の季節になりました。首を曲げて煮上がる姿が釘のようなので釘煮と呼ばれるこの料理は、おそらく唯一の神戸の郷土料理ではないでしょうか。そしてその旬は、二月から五月まで。というのも、二月頃になると須磨の浜には「ふるせ」と呼ぶ十センチから十二センチのイカナゴが出回り「新子」を産みます。五月には七センチから八センチくらいまで育ってしまい、がたりと風味が落ちてしまいます。小生は、その正なる作り方を知ってはおりますが、作ったことは一度もありません。でも垂水在住の同業者、ミステリー作家の高島哲夫氏は、毎年、この季節になると、何十キロと自作して、見事なイカナゴの釘煮をお裾分けしてくれます。いい友人を持つ

たものです。

ところで先ほど、唯一の郷土料理などと書きましたが、本当にそうなのかと気になって、古い書物引っ張り出して調べてみると「あな茶」という料理を発見して、どきりしました。「あな」だけでどきりとする小生がもちろん悪いのでありますが、なんのことはない、これは焼き穴子の茶漬けでした。焼き穴子をぶつぶつと一センチくらいに切り、大根おろしと、おろしわさびを用意します。これらを熱いご飯に乗せ、番茶をかけることができたり。

ほかにも怪しい料理を発見しました。名付けて「東海夫人の酢みそ和え」。はてさて東海夫人とは、なんのこっちゃ？ で、辞書を引いてみました。

広辞苑にはありませんでしたが、小学館の国語大辞典には「イガイ」のことで、書かれておりました。これ、瀬戸貝とも呼ばれる二枚貝で、貝肉は黒ずんだ茶褐色をして、あまり感心しないのですが味はなかなか。で、見たところ、女性の象徴に似ているというので、昔の人は「東海夫人」なんてしやれた名を付けたんでしょ、きつと。



■浅黄斑（あさぎ まだら）推理作家。一九四六年神戸市生まれ。西神ニュータウンに在住。一九九二年小説推理新人賞、一九九五年日本文芸家クラブ大賞を受賞。日本文芸家協会、日本推理作家協会などに所属するとともに、日本文芸家クラブ関西支部長、「きょうも風さえ吹きずん」の「ちよんがれ西鶴」「櫻島殺人海流」「トカラ北土殺人前線」など著書多数。

■連載エッセー／コーヒークップの耳 ⑨

正義

出石アカル

カット||菅原 洸人

コーヒーを淹れながら、なんの脈絡もなく口をついて出た童謡がある。

「村の渡しの船頭さんは今年60の…」そのあとである。「おじいさん」と続くのだ。

エッ!と思ってしまった。実はわたし、今年誕生日が来れば、満60歳である。しかしまだ孫はいない。

さらに、「年はとつてもお船をこぐ時は元気いっぱいいるがしなる…」(船頭さん・武内俊子作詞)

ちょっとショックだった。この歌では、60歳はすでにかなりのご老体である。船をこぐ時だけ元気になるのだ。わたしにその自覚は全くなかった。調べてみるとこの歌、昭和16年に流行している。その当時の60歳はそうだったのであろう。昔の人は随分早く老けたのだ。そう言えば、二葉亭四迷は46歳、正岡子規36歳、国木田独步38歳、そして夏目漱石は50歳で死んでいる。みな老成の感がある。時代が違うのだ、と自らを納得させている。



* *

余談が長くなってしまった。今回の「コーヒークップの耳」である。

元④の加賀繁躬さん。両方の小指を途中から千切ってしまっていて、付き合い始めた彼女に驚かれ、「ちょっと深爪しただけや」と言った話を、この連載の第一回目に書いた。その人の話をまたユーモアがあるものだから、この人の話はいくらでもあって、月一の連載なら彼のことを書くだけで保てるというものだ。しかしながら、お洒落な『KOBECOCO』の編集長が、品位が落ちるのを心配して許してくれそうもないので、時どき顔を出してもらう程度にする。

わたしには無縁の世界を生きて来た人なので、この人の話は興味津々である。

出所の際の気持をたずねてみた。

「家の天井がえらい低く感じたのが妙に印象に残ってマ。二年半、監獄の天井を見てたからなあ」
「思いがけない感想である。けっこう繊細な神経をしているのだ。見かけとは全く違う。」

「最初にしたことだったことですか？ そらやっぱりオンナですがな。嫁はんと久しぶりに家で向かい合うたら、なんや照れ臭かったなあ」

体重90キロ。足を洗ったとは言っても、こわもて顔のスキンヘッドである。嫁さんとこれから久しぶりのナニという時に照れてしまうとは、滑稽！いや失礼、カワイイではないか。

家内が出した筑前煮を肴にビールを飲みながら

話してくれる。うちのメニューにビールはないのだが、時間帯によっては要望に応じている。

「この筑前煮、美味しいなあ。大学行ってた時に初めて食って、美味いなあ思たんやけど……。えっ？ 大学でっか？ わしが行ってた大学は国立でっせ。ちょっと塀が高こましたけどな。規律もそら厳しいもんでした」

ビールが入ると、こんなユーモアを交えながら、話はいつまでも続く。

「こないだ、並んでバス待ったんですわ。一番前に通院のおばあさん、その後ろで男が新聞読んで、次にわし、後ろが若い女の子やった。そこへネクタイ絞めた男が来よって、ウロウロしとって、バスが来たらスッと一番前に出て乗ろうとしよったんや。『コラッ、ワレー！』ゆうて襟首つかんで引きずり下ろしたった。いや別に正義ぶったわけやおまへん。ほかの客はどうでもよしおまんねん。並んどの者の顔、一応見といて、こんなんやったら割り込んで大丈夫、思いよったんやろ。ゆうたら、わしの顔の値踏みしよったんや。一発カマシ入れんわけにはいきまへんわな」
その男、さぞ恐かったであろうが、胸のすく話である。また「正義ぶったわけやない」というのが正直でなんと面白い。

いずし・あかる 43年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒークップの耳」（編集工房ノア刊）にて、2002年度第31回ブルーメル賞文学部門受賞。

■新連載小説／③

神戸はしけの女

岡本真穂

絵・新家保夫



神戸のカモメ

船の中がざわめいている。

荷物を纏める人、眠っている子供をゆり動かす母、神戸が近づいたのだろうか、船の中に人々の動きが目立ってきた。しばらくして船内アナウンスが入り、もう少しで神戸に着くことを知らせる。

とみは順一が港まで迎えにきてくれるということでそれ程不安ではなかった。

ねんねこでしっかり茂を背負い、柳ごおりと垢抜けのしないボストンバック、大阪時代に買った大事な布製の手提げ袋をしっかりと持って船上にと近づいた。荷物の重さも気にならない風情で、とみは下船する人の流れの中に神戸人らしい若い二人組の女性の服装が気になった。

長めのフレアースカーツに水色のセーターを着た二十七、八才の人と、花の柄が入った黒地のスカートの白いセーターを着て、うすいレインコートのような物を上から羽織る女

性にとみは思った。

「やっぱり神戸や。あかぬけしてる」

とみは多度津の港を出るとき見た風景と異なる神戸の活気ある港の様子を、茂を背負う肩の重さも忘れるように見ていた。

人の群はなれた様子で関西汽船の船着き場からそれぞれの家路につくのだろうか、早足で消えていった。

「おばちゃん」

「なんね。おばちゃんじゃない。ねえちゃんね。」

とみは両手に荷物を持ったまま子供にいった。

「アメ落した」

子供は一大事のように、見ず知らずのとみにいった。

「何処ね」と、とみは子供の指差す方を見て順一の姿をさがさなくてはどうあせりを感じていた。

「落したのはきたないけん、お姉ちゃんのいも飴あげる」

とみは布製の手提げ袋から新聞紙につつんだ白いも飴を出すと、小さな手のひらに渡した。子供は逃げるように口にはおぼると関西汽船の船着き場から消えた。

「茂」

順一の元気な声が笑顔と共に近づいて来た。とみは元気な顔に笑みをいっぱいためて順一の顔を見た。

「つかれたろ」

小柄な順一の体に似合わない太い腕がとみの両手から軽々と順一の手の中に持ち変えられた。とみは茂の重みを背に感じながら、順一の手を大きく受止めていた。

昭和三十二年頃の神戸は西部海面埋立第一工区が着工されたり、市立須磨水族館が開館、市立神戸婦人会館が開館したのもこの頃であった。

また、港湾労働者に絶対的な力を持っていたのが手配師で現場監督の役目を持っているのが常であった。人夫と称される人達は手配師に不利なことは絶対口外しない。この結束にそむけば、たちまち神戸港にいられ

なくなるだけでなく、どこの港でも相手にされなくなってしまうのである。

当時起ったリンチ事件も同僚の人夫だけでなく、重傷の本人すら「事故だ」といつわり続け警察も歯が立たなかった。

昭和三十一年九月十六日付毎日新聞は、全港湾労組神戸地本（多賀一委員長）が秋季闘争の一環として、手配師組織追放へ立ち上がることを報じた。しかし、手配師といわれる人達は、各荷役会社の正式職員の労務係として届出されており、その人達の行為も表面上からは法的取締りの理由がなく、労務内容も多種多様で、その労務内容の差によって賃金が異なっており、容易にピンハネの実態がつかめないという状態で、たとえ暴力的手配の実態にさぐりを入れても、法律的になんらの取締りの方法がみつからないのが悩みといえれば悩みであった。多賀一委員長の秋季闘争のスローガンも多くの問題をかかえることとなり、上層官公庁への働きかけと同時に、職場集会によって労務者自体の意識向上をはかることが急がれた。

神戸新聞は、

港湾労働者は泣いている。

ピンハネが「手配」三昼夜労働もザラ

ただ耐えるより反抗の手段もない世界

ミナトのオンボロ人生

ゴロ寝の三十円宿 手から口の暮し

あふれたらメシ抜き

仕事も「手配師」のきげん次第

などと昭和三十一年九月十五日から港の様子を書きたてた。

一方朝日新聞などでも、日雇新賃金制、来月から労働法に即し、とか「手配師排除」を支援、兵庫総評全国運動へ起つなどと、朝日、毎日新聞なども港へのメスを入れた。

順一は日神運輸という大手の会社に採用されており、日雇労働者の立場とはがっていた。

「腹へったろう」

「うん」

とみは素直に答えた。家を出てから茂にお乳を飲ませたり、おしめを変えることに時間を取られたせいとか、食事らしい食べ物を口に入れていないのに気がついたのか、どっと腹の中に空腹感を感じた

とみは順一の背越しに見える六甲山のゆるやかな緑の山を、佐柳の海から見える山々のつらなりと似ていると思った。

順一は玉子丼ときつねうどんを注文した。

とみは「玉子丼」と順一に小さな声でいった。眠けがさしたのか茂が泣き声を上げた。よし、よし、と二十三才の母親は周囲に気をつかったのか店の外に出て茂の泣き声が静まるのをまって店に入ってきた。順一は久しぶりに逢う息子をなれない手つきで、とみの背から抱きあげた。周囲の客も垢抜けしない若い二人のカップルを優しいまなざしで見ていた。順一はビール

を一杯飲むと、茂をあやししながら、とみに丼を食べるようにすすめた。茂がまた泣き出しそうになった。

とみは茂を自分の胸に抱き大きな乳房を出して茂の口にくくませた。茂は母の胸のぬくもりに安堵したのか一生懸命とみの乳房を吸った。

「先に食べて」





とみは、うどんのさめるのを氣遣った。順一は男らしく、うどんと丼を
あつという間に食べ終った。すやすやと茂の寢息と共にふくよかな、と
みの乳房は順一の視界から消えた。

うどん四十五円、牛乳十三円の頃である。神戸に少し慣れたのか、順
一は神戸に外国人が多くいて食べ物も外人向けの物が多くあることを少々
自慢げにいった。先程見た女性の服装を思い出し、神戸にしていることを、
とみはうれしく思った。

順一は日神運輸から五十トンの船を一隻与えられていた。主に野菜、
果物を大型船に運んだり荷受けに行ったりするのが仕事であり、この日
も早朝より一仕事終えた後だけに氣持にもゆとりがあった。

今日からとみの生活は、この五十トンの船の中で過ごすこととなる。
昔の船だまりは一社二十隻から百隻ぐらいまで大小の会社が自前の木
造船を持っていた。

とみは関西汽船の乗り場から歩いてさほど遠くない船だまりまで行っ
て、その船の多さにびっくりしたような顔をした。一つの村
のように数えきれないような大小の木造船が海にゆれていた
「危ないけん気をつけろ」順一はとみの手を取るとゆれる大
型の船にとみを誘導した。次から次へ、十二、三隻の船を通
り過ぎた。それらの船の持ち主も誰一人文句をいう人はいな
かった。それもそのはず、互いに誰かの船までの道路のよう

なもので水上で生活する人達のそれが自然の姿なのだ。「ここだ」順一
が立ち止った。船の中では小さい方だろう。とみはゴザ一枚程ある船先
の生活の場を見、茂を寝かせる舟底のゴザ三枚程ある部屋で三人の生活
が始まるのだと覚悟させられた。とみは順一と茂がいれば幸せであり、
佐柳で過ごした漁場の生活も父の姿を見て育ったせいもあり、町中のゆっ
たりする生活を知らないとなつてよかったのかも知れない。

船底のゴザが敷かれた部屋は中腰でないと動けない設計になつていた。
船の大きさと荷物を積む積載量による設計の条件でもあつたようだ。風
呂はもちろん、電気、水道もない、明りはランプ、水は港からホースで

船内の木の桶に入れる。洗濯も港の水の出る所を利用して洗い、荷物を積んでいる何処かにロープをはり干すのだった。

とみは火起しから始めた。茂のミルク作りのためである。順一が何処からか木の切れ端を集めていた。船先の入った所にあるゴザ一枚程の場所少し高くなっており水桶、コンロは座ったまま使わなくてはならない不便さがあった。その反対の所に申し訳のような奥行のない棚があり、男世帯を思わせるようにタバコと灰皿、乾ききった食べかけのみかんが置いてあった。湯の沸くのを待つ間、とみは茂を寝かせるために船のゆれをかわす格好で用心深く船底の方へおりて行った。身体をかがめたまま茂を床に寝かせると、急いで湯の沸く所へ行こうと立ってしまったのだ。ゴツン、とみは始めて船底の低さに頭をなぜながら苦笑した。ようやく一心地ついた頃神戸の夜景がほんのり見えた。船上の荷物を積む場所だけが自分の低い背丈を満足させ無理のない姿勢でいられる場所であった。

とみの初めての神戸の夜は、茂に乳房をふくませながら、船酔いにとみ自身何度も食べた物をもどしてしまった。最後には金だらいを横に置いてはきながら茂にお乳を飲ませた。その状態は四・五日続いた。しかし茂は母の苦勞を知らぬげに母の胸に小さな手をしがみつくような格好であて、母の顔をじっと見つめていた。

カモメよ

カモメ

朝が来たなら空を見て

佐柳の母に話すんよ！

心の中で話すんよ！

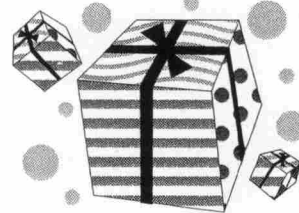
(続く)



岡本真穂 (おかもと まほ)

詩人。関西文学同人、関西詩人協会会員、神戸異分野交流会会長。著書「詩画集 花野」「御影」。

プレゼントメイト



■プレゼントメイトへのご応募は…

ハガキ・FAXに、希望するプレゼント名・郵便番号・住所・氏名・年齢・職業・電話番号・今月号の感想を明記の上、下記宛先にお送り下さい。なお、商品の発送をもって発表にかえさせていただきます。応募宛先〒650-0001 神戸市中央区下山手通2-13-3建創ビル401(有) 月刊神戸っ子プレゼント係
TEL. 078-331-2246
FAX. 078-331-2795

★イスラームの美の世界

10組20名ご招待

MIHO MUSEUM(ミホ・ミュージアム 滋賀県甲賀郡信楽町桃谷300)では

6月8日(日)まで春季特別展「エジプトのイスラーム文様―暮らしの中に華開いた美しき意匠」を開催中。7世紀から14世紀にかけて栄えたフスタートでは、日常使われていた飲料水用の小壺に、目を見張るような凝った幾何学文や、動物文をあしらった美しい意匠をほどこしていた。彼らはどんな美意識を持ち、どんな暮らしをしていたのだろうか。早春の信楽で、生活文



青釉金彩堆文細頸瓶
イラン1173-86頃

化に根付いた「イスラームの美の世界」を堪能しよう。同時開催「中央アジアの黄金の国―古代バクトリア遺宝」。締切は4月末日まで。
MIHO MUSEUM 学芸部
☎0748・822・3411
FAX 0748・822・3414
<http://www.miho.jp>

★「青のリアーモンドナゲツト」うす塩味 新発売!



優れた
ヘルシースナック

ブルーダイヤモンド・アーモンドでは、アーモンドをビスケットで包み込んで焼き上げ、軽い塩味と青のりで風味をつけたスナック

「青のりアーモンドナゲツト」

「うす塩味を新発売。サクツ、カリツとした食感と、ブレインな和風の味わいがお茶受けとしても、おつまみとしても手軽に楽しめるアーモンド製品。今回の発売を記念し、1ケース(30g100円×16パック)を100名にプレゼント。締切は4月末日。

★うるおいとやさしさの新しいダヴボディウォッシュ

日本リーバ株では、ダヴボディウォッシュを改良新発売。肌にやさしい洗浄成分を新配合し、デザインも高品質で女性らしいイメー



デザインも一新
ダヴボディウォッシュ

ジに一新した。この「うるうるおいとやさしさ」を兼ね備えた新しいダヴを10名にプレゼント。乾燥の気になる季節、肌のうるおいとみずみずしさを守るため、「ダヴボディウォッシュ」をぜひお試しください。締切は4月末日まで。

★HOTEL古賀の井

コガノイベイホテル
ご宿泊優待券プレゼント



★4枚綴りの優待券

古賀の井グループでは日頃のご愛顧に感謝し「御宿泊優待券」を発行。お部屋タイプ、お料理に合わせて選択できる4枚綴りの優待券で使いやすい形式になっている。こんなと湧き出る温泉に入り、料理革命に取り組んだお料理が存分に楽しめる。この優待券を5名にプレゼント。日常のストレスから開放され、心も身体もリフレッシュしよう。締切は4月末日まで。

愛読者 サロン



★毎日お寒い日が続いて居ります。初春のお喜びとともに「神戸っ子」の500号おめでとうございます。

一月はいつもより入荷が遅れたようで、今頃になってやっと手にはいりました。可愛らしくおシャレなマガジンがうれしくて、レジで受けとった後、タウン誌のコーナーを覗いてみましたけれど、どのタウン誌よりもひときわ目立っていたように私には見えました。

「500号記念展」もあつたようです。表紙を飾った名画の数々、近ければ行きたかったと残念に思っています。「復刻版名文集」はこのような味い深いエッセイが今まで載せられていたのだと思いつつ、一つ一つ読ませて頂きました。私の本棚には「むかしの神戸」「神戸・街ものがたり」「トリアロードスタイルブック」「神戸雑学」「神戸ものがたり」「神戸わがふるさと」(陳舜臣さんのものは他に

もあります)。そしてその隣には毎月増えていく「神戸っ子」が並んで居ります。神戸を離れた年月の方が長くなってしまいました。が、私はずっと『神戸っ子』だと思って居ります。

「二月号はもっと早く入荷しますので。」私が何度か催促するものですが、ジュンク堂の定員さんがそういうって下さいました。今年の冬は例年より寒いのでしようか、東京は積雪もありました。御忙しい日々でしょうが、どうぞ御体を御大切に御過ごしくださいますように、祈りつつ。

(東京都・西垣武子)

★「びっと・いん」のコーナーでご近所の「辛屋」が載ってました。辛いものがだめな私は、「ラーメンは食べたいけど、辛いものはっかしかな。」と思って、素通りばかりでした。けれどすじラーメン『石焼ビビンバ』って好物。ぜひ、いつてみたいと思います。

(明石市・安岡陽子)

★1月号はまだバラバラとしか拝見してませんが、なんか神戸にゆかりのある人達の文面が載ってるので、

きっちり見させてもらうつもりです。姉は昔からコリアン先生(遠藤周作)と筒井康隆の大ファンでした。佐藤愛子の女子学生時代の話なんかも姉からチラッと聞いたものです。P74の兵庫と神戸を読んで母がよく言っていたことを思い出しました。神戸は兵庫から初まり、今の三宮みたいなものだったと。兵庫出身の淀川長治さんと、亡き大おぼさん(震災で亡くなりました)は小学校の同級生だったそうで、淀川さんの楽屋へ押しかけて行ったことがあると(傍迷惑な話です)も聞きました。ノスタルジーでんナ!

(高槻市・高橋枝里)

★学生時代の頃の神戸の面影はなくなりつつありますが、その中変わらず神戸の心臓をつかんでいる神戸っ子!頑張っね。

(西区・丸川奈都子)

★500号おめでとうございます。私も長く愛読させていたでいますので、とてもうれしいです。本号の記事も以前読んだものもありなつかしさでいっぱいです。

(西区・下川典子)

★いつも神戸っ子楽しみに読ませて頂いています。今号の酒特集2も灘の生一本他、昔の酒蔵・資料館など詳しく又美しいカラーの案内で興味深く拝見。いつも尾道(広島県)から、らん展を見に出て来るお酒大好き(花を愛し酒を愛する人)人間の従姉と、今年は何処を訪ねようかと思案中です。

又、シャンソン堀郁子さんの受賞の記事、今年の神戸シャンソンの夕べを楽しみに待っています。人生は旅や、3人の方の鼎談大変楽しく読ませて頂きました。人柄がしのべ縁が解りました。

(西区・小池瑞江)

★今月号の特集のひとつにお酒があり思わずニヤツとしてしまいました。私の住んでいる所は御影という事もあり、今回記載されていた酒蔵館はとても親しみ深いのです。散歩がてらに行けるのは、お酒の大好きな私にとって幸せな事です。

(東灘区・西盛天香)

★42周年を迎えた月刊神戸つ子にいろいろお世話いただいた方々

田辺聖子	澤田勝寛	白石弘子	青木重雄	上島達司	川瀬喜代子	瀧川政子	橋本一豊
陳舜臣	島京子	有澤武	荒川克郎	鶴殿麻里絵	嘉本領夫	龍口篤夫	畑崎廣敏
佐藤廉	白坂能朗	安藤忠雄	内田健司	内田邦子	木口衛	筒井康隆	坂東節子
森實勉一	新谷瑠紀	浅木幸雄	馬野英子	榎本重夫	木下章夫	釣秋桜	坂野惇子
浅井満	武田則明	浅木隆子	大庭浩	榎本重夫	木下健	弁本混	福富震一
新井満	田中國夫	天野桂子	伊勢田史郎	奥村孝	小室豊允	中内功	福富初子
石阪春生	中村友一	伊勢田史郎	今津奈加子	鬼塚喜八郎	上野倫子	中内功	藤田浩司
今井啓介	永田朋	伊勢田史郎	井戸敏三	貝原俊民	笹山幸俊	中野典子	藤間利佳子
鶴殿ようこ	中西瑛	市野弘之	井植貞雄	貝原俊民	鈴木幸子	長澤昭	藤本統紀子
榎本靖子	林五和夫	伊藤研一	伊藤文子	角本稔	加藤義雄	下村俊子	堀本恵子
王柏林	藤本ハルミ	石野順子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
大崎泰三	望月美佐	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
岡本真穂	松本幸三	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
緒方しげを	森本泰好	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
大木本美通	安水稔和	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
加藤隆久	吉田泰和	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
北大路楽園人	米田定蔵	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
小島知光	渡辺二笙	伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
神晴夫		伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子
佐野連箕		伊藤文子	市村礼子	嘉納穀六	霜寄敏文	西村功	堀本恵子

羽多悦子
野澤太一郎
光葉貞雄

村松友規
元永定正
村上美穂
村上和子
森喬一
森美代子
百崎俊郎
矢田立郎
山田弘
大和久芳
行吉哉女
山森大雄美
吉島淑子
蓮明秋
若林輝雄
神戶青年会議所
神戸商工会議所
神戸百店会
(敬称略)

ざくろと古い城の絵
〈女のいる風景〉
162×164



素描
〈女のいる風景〉



〈表紙のことば〉

130号ざくろと古い城の絵〈女のいる風景〉は2000年の作品で新制作展に出品したものである。また、エンビツ素描は最近かいたものの一つである。表紙をかざるにあたって先ず、女の横たわる姿を入れたくなりこのざくろと古い城の絵〈女のいる風景〉をトリミングすることを考え、その下の空間に女の横顔で構成したわけだが、水彩による自由な動きを画面づくりにうまく役立たせられたと思っている。

2003年4月 石阪 春生

宮崎書店西宮店
宮崎書店西宮店
宮崎書店西宮店
三田市
ブックフォーラムジュンク堂豊岡
あまね書房ウッディタウン店
小倉山書局
小倉山書局
小倉山書局
森井書店
井上書店
宮崎書店
ブックスサンヨー
ブックス堂姫路支店
明石
BOOKS松中リオビル店
喜久屋書店明石ビル店
アキス堂書店明石店
ブックスウィング三木
ブックスウィング三木
ブックスアルファ加古川店
ブックスうかいや加古川いしもり店
ブックスウィング小野
西脇市
アズ
アズ
津和野一本町
津和野津名一丁目
津和野津名二丁目
津和野津名三丁目
東京都千代田区
三信書店
ブックス堂プレスセンター
ナカバネブック香取店
ナカバネブック香取店
東京都渋谷区
阪急ブックフアースト渋谷
東京都新宿区
ブックライナー
東京都豊島区
ブックス堂池袋坂本店
日東電機
エヴァネットワーク
大阪府大阪市中央区
ブックス堂書店なんば店
大阪府北区
ブックス堂書店大塚本店
ブックス堂書店大塚分店
大塚駅前旭街野区
樋口書籍
ブックフォーラム原田店
八幡市
油竹書店
油竹書店
Bフレッド
高松市
宮崎書店カルチャーベース
福岡市
ブックス堂書店福岡店
鹿嶋市
ブックス堂書店鹿兒島店

★500号と井植文化賞報
道部門の受賞記念のパーティ
を神戸ポートピアホテル備
楽の間で、雛まつりの3月
3日の夜ひらかせて頂きま
した。ご参加ご協力心より
御礼申し上げます。今年は
神戸っ子賞をぜひ女性にと
神戸風月堂の下村俊子社長
へ。雛まつりらしく。

(小泉美喜子)

★神戸ウイングスタジアムが完成。ピッチとスタンドの距離が6メートルと選手たちの息遣いまで伝わってくる。神戸アスリートタウン構想の中核となることは間違いない。クラブチームの実力はもとより、スポーツビジネスを根付かせるチャンスだ。(高橋直人)

(高橋直人)

★小泉編集長が取材で、録音したテープが切断してしまっただと思っただがなんとか修理して、原稿を仕上げていた。編集者魂を見た。

（大原宇勉）

★何かの賞の選考会に同席できるといふのはとても貴重な経験です。幸福な偶然だったと思います。受賞された方々ともお会いでき大変光栄でした。

（鳥羽羽子）

(鳥羽朗子)

阪神タイガースの優勝が神戸はもとより阪神間の不景気をぶっとばしてくれることでしょう。

（川上豪）

（川上豪）

★日曜日の武蔵の顔、いつもどこかで見ている気がするなあと思っていたら、はたと気付いた。それは毎朝マスカラを塗る時、鏡にうつる自分の顔だ。(山本牧)

(山本牧)

本誌2・3月号で下記の訂正がありました。ここに訂正するとともに、関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びいたします。

P116
ホテルオークラ神戸
(誤) 078-333-350
(正) 078-333-3533

P116
ホテルオークラ神戸
(誤) 078-333-350
(正) 078-333-3533

取締役主筆／小泉美喜子
編集・営業／高橋直人
大原宇勉 川上豪
鳥羽朗子 山本牧
経 理／小林昌夫
.....
P40
(誤)次女の麻実さん
(正)長女の実美さん
(誤)皆川秀善衆議院議員
(正)谷川秀善参議院議員

(誤)次女の麻実さん
(正)長女の真実さん
(誤)皆川秀善衆議院議員
(正)谷川秀善参議院議員

月刊神戸っ子 No.502
★発行／2003年 3月20日
★発行所／月刊神戸っ子編集室
〒650-0011
神戸市中央区下山手通2-13-3
建創ビル4階
TEL.078(331)2246(代)
FAX.078(331)2795
kobecco@po.sphere.ne.jp
★定価：本体477円＋税 送料10